

第 1714 回（5 月 6 日）

マレーシアのパーム油産業

石 田 章

1960 年代以降生産量が急増しているパーム油は、世界の油脂生産量の 2 割、油脂貿易量の 4 割を占めており、大豆油と並ぶ重要な植物油である。パーム油の最大生産・輸出国はマレーシアであり、世界のパーム油生産量の半分、輸出量の 6 割を供給している同国は、世界の油脂需給事情に大きな影響力を持っている。本報告では、同国のパーム油産業の発展、生産と輸出の動向を検討し、パーム油生産の将来展望を行う際の基礎資料を提供することを目的とした。主な内容は次の通り。

1. パーム油産業の発展

——栽培面積・生産の動向——

マレーシアにおいて今世紀初頭に始まった油ヤシの商業的栽培は、1960 年代以降に飛躍的な発展を遂げた。この背景として、次の諸点が指摘できる。1) 合成ゴムの開発などによる天然ゴム需要の減退によって、油ヤシの代替作物であるゴムの国際市場価格が下落したため、パーム油価格のゴム価格に対する交易条件が改善されたこと。2) 農業部門の多様化を図る政府が、油ヤシ栽培を積極的に奨励したこと。3) 政府が農民の貧困撲滅を主要目的とした大規模なパーム農園への入植計画を実施したこと。4) パーム油は、他の植物油脂と比較して相対的に安価であり、かつそれらと容易に代替可能であることから、国際市場ではかなりの競争力を有すること。5) 1960 年代に入り、当時パーム油の主要生産国であった中央アフリカ諸国では、政情不安定化による外国資本の撤退が相次いだため、パーム油の生産が大幅に減少した。この結果、マレーシアのパーム油産業が国際市場に比較的容易に進出することができたこと。

油ヤシ農園は、主に港湾や交通網が整備されているマレー半島南西部と新規土地開発に

適した広大な森林地域を有するマレー半島東部に集中している。しかし、マレー半島部における新規土地開発に適した森林地域の減少などから、最近では東マレーシアでの油ヤシ栽培が盛んになりつつある。

2. パーム油輸出の動向

パーム油生産の拡大に伴い輸出量も急増した。また、1970 年代中頃以降、食品産業育成のために加工パーム油の輸出税が大幅に引き下げられたことから、加工パーム油の輸出が急増した。当初パーム油の主な輸出先は欧州であったが、1970 年代以降、開発途上国への輸出シェアが急増している。中でも中国への輸出増加は顕著であり、現在では総輸出量の 20%程度が直接同国に輸出されている。

3. 加工産業の現状

パーム油の精製産業は明白なオーバー・キャパシティの状態にある。事実、1994 年時点において、51 の精製工場の内 12 工場が休止中であり、精製産業全体の処理能力のわずか 30%程度しか稼働していない状況にある。しかし、かかる精製過程における熾烈な生存競争は、精製産業の効率性を向上させたと同時に、主なパーム油関連企業による川下産業への事業拡大を促進した側面もある。

4. パーム油産業の将来展望

現時点では、マレーシアは、油ヤシ園の栽培管理やパーム油の精製技術などの諸点において、他の主要生産国を圧倒的に凌駕している。しかし最近、マレー半島部では、開発に適した土地の減少、非農業部門による土地需要の拡大、深刻な労働力不足、政府機関による新規農地開発の大幅縮小などのために、パーム油生産の増加が急速に鈍化すると考えられる。また、マレーシアのパーム油関連企業は、広大な土地と安価かつ豊富な労働力を有するインドネシアにおける油ヤシ栽培に力を入れており、来世紀前半には、インドネシアがマレーシアを抜いて世界最大のパーム油生産国になると予想される。